

対象児の生齒は、平均7.8か月であつて、生下時体重が少ない者程生齒時期が遅くなる傾向が見られ、全体平均としても、標準よりやや遅いように見られた。

対象児の乳児期栄養方法は、母乳28.3%、混合28.3%、人工43.4%であつて、母乳栄養による者が一般児にくらべ低率のように見られた。対象児に見られやすい、ひきつけやすい、脳貧血を起こしやすい、便秘しやすい、というような傾向が、生下時体重が少ない者程、多いことが注目された。ツ反応陽性率は、一般上にくらべ低率であつた。

対象児について、11の項目よりなる言語発育調査を母親に回答してもらつた結果、発育は広い分散をもつていたが、これをシュテルンの示している言語発育の標準とくらべると、早い年齢でできるよくなる喃語のような項目では平均10.4か月、少々遅れの傾向が見られ、年齢の進んだ段階の項目については、遅れの傾向が見られなかつた。運動機能についても同様な傾向がうかがわれた。

しかし、未熟児でも、二年以降においては、愛情をこめた育児によつて、一般児と殆んど変りなく発育していくのではないかということが、今回の調査の結果考えられたことであつた。

(大会発表論文抄録46—47頁)

幼児の健康管理に関する研究(第1報)

浦和・本間幼稚園 本間 良子

和田 桜子

目的 幼児の健康管理に関する研究の一部として行なうものであ

つて、幼児のあそびにおける疲労度を測定し、考察検討する事によつて健全な幼児保育の發展に寄与することを目的とする。

方法及び研究成果

A 予備検査 家庭環境調査、出席率、生体測定及び指数による身体特性の分析、オゼレッキ氏運動能検査中個別的運動能検査法による検査、虫卵検査を行なつた。

B 遊びによる疲労度測定

I 体重測定 体重の消長から疲労度をしらべた。登園時、退園時、昼食前後の体重を一週間継続して、秤量100kgの体重計で測定。

II 下腿周測定 被検者を立体的のまま、巻尺で下腿の最も太い所を測る。脚氣、心臓、腎臓疾患のない園児について、運動会前後、並びに一週間継続して登園時、退園時に測定。

III 視力 疲労によつて視力が低下するという説から、登園時、退園時に一週間継続して幼児視力表により測定。

IV 尿pH測定 運動によつて血液が酸性に傾く場合、その程度に応じて尿pHも低下すると考えられるので、この運動負荷による尿pHの変化を知るために測定した。pHは5.6から6.8を前後し、全員弱酸性。

V 尿蛋白証明 尿約5ccを試験管にとり、リトマス紙で尿が酸性である事を確かめた後、20%ズルフォサリチル酸溶液をうすく6滴加える。蛋白の存在で尿が白濁する。安静時に尿蛋白を認めない園児について、登園時、退園時に一週間継続して施行した。

VI 尿中ウロビリソンの証明 尿5ccにエールリッヒ試薬1ccを加える。ウロビリノーゲンが存在すれば尿が赤色を呈する。肝臓機能障害を認めない園児について、登園時、退園時に一週間継続して測定。

C 結果 I 登園時、退園時の疲労度、即ち幼稚園のあそびによ

る疲労は今度の測定法によって認められない。Ⅱ 月曜日の登園時に6.5に尿変化を認めた。Ⅲ 金曜日の登園時に6.4に尿変化を認めた。Ⅳ 秋季運動会における下腿周測定では15名中、+12名、+3名、-0名で有意の差を認めた。

D 考察 Ⅰ 結果Ⅱ、Ⅲの尿変化は登園時のみで退園時には(一)であることから、前日の疲労が持ち越されたものと考ええる。即ちⅢは前日の睡眠不足が原因であったので、午後の午睡で回復したものとみられる。Ⅱもまた、土曜日から母親の実家に遊びに行つて日曜日夜帰宅した。この場合も午後の午睡で回復している。Ⅱ 4月から11月までの全園児発育は、体重15~4.0kg増加で良好である。Ⅲ 多くの幼児を少数で同一時刻になるべく正確に検査出来る幼児疲労度測定法研究の必要性を認める。(大会発表論文抄録43頁)

幼児の食物好嫌について (一)

(保育所における給食調理法と保育の影響について(1))

広島・安田女子短期大学 稲田 準子
広島・ひかり保育園 西川 純子

保育園における給食中、とくに嫌いな食品に対して、調理法、保育の方法がどのように影響するかに問題を限定し、嫌いな食品例として、予備調査の結果から人参について調べてみた。ここでは、保育園での給食を中心に報告する。

はじめに予備調査として、幼児の環境調査書等に嫌いな食品として多くあげられた人参、ねぎ、魚肉、ほうれん草、大根をハガキ

大の用紙に描き、幼児五十名に嫌いな順序に並べさせた結果、人参が一番嫌いな食品としてあげられ、ねぎがこれに次ぐ。

広島市近郊、八木ひかり保育園で、人参を使った給食を、桐原給食主任の考案により次の献立で12回実施した。(野菜サラダ、てんぷら、煮込み、煮め、野菜汁、油いため、酢和え、カレー汁、なます、オムレツ、ピーナツ和え) 園児45名を対象として、全部食べた園児と、残した園児とに分けて比較してみると、全部食べた園児の割合が、野菜サラダでは80%で一番高く、最も好まれている。一般に大きく切った場合より小さく切つて、あまり形がはっきりわからない方がよく食べる傾向がある。但し、料理は、味つけによっても大きく影響するので、その点も考慮しなければならぬが、好きな食品と組合せた場合、(例、オムレツ)にも残量が少ない。

次に園児を二群に分け、A群には創作童話「人参を食べた坊やと食べない坊や」(キリンの子どもが、人参を食べなかつたら弱くて、走つてもびりだったが、食べたら強くなった)というような内容のお話を食直前にする。B群には、何も話さず、後両群同一の食事を与え、両群を比較してみると、両群間に有意差がみられ、A群の方が残量が少ない。但しこの差が持続するものかどうかは、更に検討を重ねてみる必要があると思われる。

食物好嫌については条件が複雑で、簡単に結論が出せないが、調理法と共に、保育中のお話などもまた、食べる量を増すのではないかと考えられる。但し、この対象群について言えることがどの程度一般に言えるかは、考察の余地があり、更にこのような調査においてA群、B群として選ばれたことが、園児に特別な感を持たせ、効果を促進したのかも知れないと考えられる。更に調査を進め、給食を効果的に行なうよう、研究して行きたい。(大会発表論文抄録76~77頁)